

[美術館員随想]

## 美術館の特別展について

当館次長 成瀬不二雄

「美のたより」107号(1994年夏)において、私は「平常展について」という一文を書き、美術館では所藏品や寄託品による平常展が基本となるから、観客の皆様も特別の催しのときばかりでなく、もっと各美術館の平常展に足を運んでいただきたいということを申しました。しかし、美術館では外部からの美術品による特別展を開くことももちろん必要で、それにより館を活性化し、学芸員の日頃の調査や研究の成果を世に問うことができます。また観客の皆様も特別展のおかげで、個人や社寺の秘蔵する名品を眼の当たりにすることができます。しかし、なかなか鑑賞できない名品を陳列することが、特別展の主要目的かという、私はそれに疑問を感じています。

今から6年前に、ある大新聞社が東京国立博物館を会場として、国宝に指定されている美術品を日本各地から集め、公開する大展覧会を催したことがあり、空前とも言える大観衆を集めました。もともと、国宝の中には移動の難しいもの、社寺等で公開されていて展覧会へ出陳できないもの、そして個人が秘蔵していて借用しにくいものなどがあるため、その展覧会は主催者の当初の計画のように思い通りのものが集まらず、文化庁、東京・京都・奈良の三国立博物館の所藏品や寄託品が中心となったようです。

この展覧会について、専門家の間からは、このように多くの国宝を移動させることへの懸念、各時代や各国の美術の名品を特に脈絡なく集めることへの疑問など、いろいろの意見が出ました。また、国所有や社寺が国立博物館に寄託している国宝は、順次公開されており、国立三館の平常展をまめに訪れていれば大いに見ることがで

きるから、それらを一堂に集めてみても、無意味だという意見もありました。

しかし、新聞社の事業部が主催する特別展として、この国宝展は大いに意味があったし、また成功だったと私は思っています。まず、このように規模の大きい特別展は、大新聞社でなくては、国立博物館さえ、その館自体では催すことができません。また、たとえ専門家の間ではよく知られた国宝であっても、一般の方が国立博物館の平常展を頻りに訪れることはなかなかできませんから、それらを一堂に集める特別展は、大きな意義があったと思います。また、決して皮肉な意味でなく、新聞社の文化事業部にとって、採算ということも大事ですから、この国宝展が大成功を収めたのはご同慶の至りでした。

ただ、マスコミの企画ではなく、美術館が主催する特別展の場合はまた違った考え方があるべきだと私は思います。ちなみに、私が若い学芸員だったとき、先輩たちからよく学芸員はよい人脈を作ることが大事だとかかされました。つまり、学芸員は研究の上で、また特別展などにより美術品を拝借するために、社寺や所蔵家と常により関係を保っておかなければならないというわけです。これはまさにその通りなので、私もそのような人脈を作る努力はしたつもりですが、はたしてそれに十分な成果を挙げることができたかどうかはわかりません。

ただ、私たちの先輩であるかつての学芸員は、なかなか拝借できない名品を特別展に陳列することが、学芸員が高い評価を受ける資格であり、またその特別展の価値であると考えていたようです。私は先輩から、「今度の展覧会には



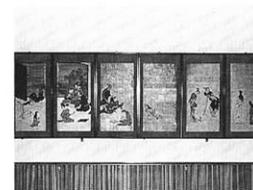
特別展「国宝・松浦屏風」(昭和59年)の展示作業  
於 大和文華館

〇〇が出た」という自慢話をよく聞かされましたし、また「どここの展覧会には××が出ている」といううわさは、現在でも学芸員たちの間でよくささやかれます。

私も基本的にはこういう考え方に賛成で、なかなか拝借できない名品を展覧会に陳列することが、学芸員の重要な能力の一つであり、またそれによって研究者も一般の観客も、秘蔵されている名品に接することができるからです。ただ、私の思い違いでなければ、従来は学芸員の間で、なかなか出ないものを引張りだすことが学芸員の能力である——少なくともその第一の資格である——と考えられてきたのではないかと思います。もちろん、そういう能力は学芸員の備えるべきものの一つでしょう。

しかし、特別展の真価は、一つ一つの陳列品が展覧会を構成するために、どのように活用されているかという点にあると、私は考えています。つまり、単に名品が出陳されているということよりも、それが展覧会の中でどんな有機的な役割りをになっているかが大事で、天下の名品も秘蔵の逸品も、そのような使われ方をして初めて生きてくるのではないのでしょうか。

少し別の話になりますが、一部の社寺や財団の中には、その所蔵する美術品の写真撮影や展覧会への借用に際し、多額の謝礼を要求する例があります。文化財の管理者としての社寺や財団の運営が必ずしも容易でない現状を考えると、



国宝・彦根屏風  
特別展「国宝・松浦屏風」  
で、はじめて松浦屏風と  
彦根屏風とが並んで公開  
されました。

こういう要求に対し、もちろん理不尽だとは言えませんし、文化財公開の原則に反すると、一概になじることもできません。しかし、特に美術館の場合は特別展の企画に際し、非常に高額な謝礼を払ってまで、その美術品を拝借することが正しいか否かを、学芸員は自問自答して見る必要があると思います。そして、展覧会を構成する上で、その美術品がどうしても必要ならば拝借すべきでしょう。これに対し、たとえそれが天下の名品であっても、展覧会の構成上で無くてもすませるものならば、いさぎよくあきらめるのも学芸員の見識だと私は考えています。このような自制によって、他館の今後の展覧会の企画に迷惑を及ぼさないですむことも考えられます。

最後に、特別展の図録について申し上げます。新聞社の企画する展覧会や奈良国立博物館の正倉院展のような場合は、多数の入場者が期待できますので、販売する展覧会図録は多量に発行できます。申すまでもなく、出版物は印刷部数が多ければ多いほど、単価が安くなります。これに対し、私どもの大和文華館のような小さい美術館の場合、特別展の入場者は限られていますから、展覧図録は数多く印刷できません。そこで、利益などほとんど考えていないのに、図録を高価で販売せねばならないこととなります。これは私ども美術館員にとって、一番つらいことの一つなのです。

季刊 美のたより No.112

平成 7 年 8 月 24 日

発行 大和文華館